



## 榎法華(とどほっけ)における言語と風習について

著者	島田 武, 橋本 邦彦, 塩谷 亨
雑誌名	室蘭認知科学研究会 第44回大会プロシーディングス
ページ	19-24
発行年	2004-09-28
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/231">http://hdl.handle.net/10258/231</a>

## 榎法華(とどほっけ)における言語と風習について

著者	島田 武, 橋本 邦彦, 塩谷 亨
雑誌名	室蘭認知科学研究会 第44回大会プロシーディングズ
ページ	19-24
発行年	2004-09-28
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/231">http://hdl.handle.net/10258/231</a>

## 榎法華（とどほっけ）における言語と風習について\*

島田 武，橋本邦彦，塩谷 亨

### 1. 背景・経緯

現在、日本語の諸方言は、マスメディアの発達などによる共通語化の影響を受けて、急速に消滅しつつある。方言は地方文化固有の遺産であるので、方言を失うことは、伝統芸能、伝統工芸、文化財を失うのにも等しい。調査地の榎法華村も、過疎化、話者人口の高齢化が進行中で、また、2004年12月には近隣町村を含む函館市との合併も予定されている。この事態を放置しておく、21世紀の早い時期に、榎法華方言とそれが担ってきた固有の文化が消滅してしまうのではないかという危惧がある。

2000年（平成12年）7月に、榎法華方言使用地域を含む渡島東岸部の方言と風習を調査・記録するための研究チームを発足させた。同年、室蘭工業大学地域共同研究開発センター・共同研究「道南渡島東岸部方言の緊急調査」の助成と榎法華村教育委員会の協力を受け、塩谷亨、島田武、寺田昭夫、橋本邦彦の4名による調査が開始された。

これまで実施された調査の日程、及び方言調査協力者（インフォーマント）は、次の通りである。

- 第1回 2000年（平成12年）9月12日～14日  
玉村栄吾氏（大正15年生まれ、元船大工）
- 第2回 2000年（平成12年）11月30日～12月2日  
玉村栄吾氏、長政スゲ子氏（大正15年生まれ、主婦）
- 第3回 2001年（平成13年）12月7日～8日  
玉村栄吾氏、長政スゲ子氏
- 第4回 2002年（平成14年）10月17日～19日  
玉村栄吾氏
- 第5回 2004年（平成16年）3月16日～18日  
玉村栄吾氏、彦野勇輔氏（70代後半、元漁師）

### 2. 談話資料作成の手順

本発表では、第1回調査で記録された談話資料を用いる。内容は、主に、子供の頃の遊びに関するもので、約70分のCD録音の前半部分に当たる。橋本が音声資料を基にカナ起しをしたものを、寺田（道南七飯町出身）がチェック・修正した。また、島田がコンピュータを用いて音声进行分析し、IPA音声記号による厳密な音声表示を作成した。

### 3. 談話記録から見た昭和初期の子供たちの遊び

#### 3.1 海で用を足す時の風習

- (1) ウミサハイルドキニモ ソノトーリ ネ イチニサンデモッテ ノ ウミノカミ  
海に入るときにも その通りで ね 一、二、三でもって ね 海の神様、  
サマタッテケレッテ ノ  
立ってくださいって ね
- (2) ソシテ ホレ オシッコスルノニ ウミサムガワネデ オガサムガッテ  
そして ほら おしっこをするのに 海に向かわないで 陸に向かって  
ションベンシタモンダ  
小便をしたもんです
- (3) タッテケレッテ マー ウミサハイッテデモ ワレワレションベンスルカラ  
立ってくださいって まあ 海に入ってからでも 私たちは小便をするから  
オシッコスルカラ ネ マ ワレワレノコトバデユエバ マ ユルシテケレッ  
おしっこをするから ね ま 私たちの言葉で言えば ま 許してください  
テユーイミナンダベシ ノ  
という意味なんでしょう ね

子供たちが海で小便をする際に、「ウミノカミサマタッテケレ（海の神様、立ってください）」(1)と言う習慣があったことが報告されている。なぜ、「タッテケレ」なのか、その理由を玉村氏は「ユルシテケレ（許してください）」(3)ということではないかと解説している。海の神様に起立を求めるのは、小便をかけると失礼にあたるから、立つてもらうことでそれが回避できるからというのが真相のようである。立つからには、海の神様は、常態では、海中にいると信じられていたと考えられる。放尿の方向が海（沖）ではなく陸地に向かってであるのも、海の神様に対する儀礼の現れであるように思われる。

#### 3.2 脅し文句としての「モンコ」のこと

- (4) マー ソシテ ナゲバネ ヨグネ アノ ナゲバヤマカラモンコクルドッテ  
まあ それから 泣けばね よくね あの 泣けば山からモンコが来るよって  
モンコクルドッテ ヨグイワレダモンダ  
モンコが来るといって よく言われたものです
- (5) オバケノモンコダモノヤラ オレダカイセツシテミタバアイニ アレノ  
お化けのモンコなものなのか 私が解説をしてみた場合に あれね  
ナンデ ユッテタダカ アノジダイニモーコガセメテキテノ  
どうして（モンコと）言ってたんだか あの時代に蒙古が攻めてきてね
- (6) モンコトモーコヲ イッシヨニシテイルモノヤラネ  
モンコと蒙古とを 一緒にしているものなのかね

(7) モーホットンド モーソーユーコードバモナグナッタシネ

もうほとんど もうそういう言葉もなくなったしね

だだをこねて泣いたときに大人の口から出る決まり文句に「ナケバヤマカラモンコクルゾ（泣けば山からモンコが来るぞ）」(4)というものがあつた。これには、言うことを聞かずに泣き喚く子供を黙らせる脅しの機能があつたようである。玉村氏は、お化けのように何か恐ろしい存在として子供時代に「モンコ」のことを理解していたが、後年、それが実は、「モーコ（蒙古）」(6)のことではないかと解釈している。ただ、疑問が残るのは、なぜモンコは海からではなく、山から来るのだろうか。周囲三方を山に囲まれて、交通を専ら海に頼らなければならなかった村人にとって、海は開けた所、山は閉じた不気味な所との意識があつたのだろうか。

### 3.3 遊びのルール

(8) ガンゼ トルワケダベシー ノ ソイデ コンド マズトッテモッテクルデショ

ウニを 取るわけなんです ね そして 今度 まず採って持って来るでしょ

ショッコトカ オヨゲネーカラ オガマワリシテ シータイテ

小児麻痺の子供とかは 泳げないから 陸地担当になって 火を焚いて

マッテルベサ

待っているんですよ

(9) シテ ワケルドギモ コレデ オッキーカラ オカマワリモシトツツ

そして 分けるときにも これで 大きい方から 陸地担当も一つ

オヨデ オキサイツテキタシトニモシトツツ ダカラ ホンツトニ ソノ

泳いで 沖に行って来た人にも一つ だから 本当に その

イジメモネカッタシノ

いじめもなかったしね

ここでは海遊びについて語られている。集団での行動、及び役割分担と分け前の公平さという特徴が見られる。特に注目したいのは、「ショッコ（小児麻痺）」(8)に代表される身体の不自由な子供たちへの配慮である。この子供たちを排除したり差別したりするのではなく、相補い合う関係の上に遊びが成立しているのである。

### 3.4 まとめ

この談話で語られている子供の遊びに関する事柄は、現在では完全に失われている。それゆえ、戦前の子供の日常の姿を伝える貴重な証言となっているのである。

#### 4. 楳法華方言の音声の特徴

楳法華方言において特徴的な音声は以下の3つである。

(10) 2種類の中舌母音：「イ」と「ウ」

(11) 母音間での子音の有声化：[t]→[d]、[k]→[g]

(12) 入りわたり鼻音

##### 4.1 中舌母音

楳法華方言の「イ」と「ウ」は共通語の「イ」と「ウ」よりも調音位置が前寄りの中舌母音として現れる。そのため聴覚印象が曖昧になる傾向があり、この傾向は「ズーズー弁」と呼ばれる方言と共通している。ただし曖昧になるといっても完全に区別が無くなるわけではなく、ほとんどの環境では「イ」と「ウ」の区別は保たれている。この二種類の母音の区別が大変曖昧になり同一の母音のように発音されるのは、「シ」と「ス」、「ジ」と「ズ」、「チ」と「ツ」、「ヂ」と「ヅ」という発音の時である。そこで「ワラシ」という語が楳法華では「ワラス」と表記されている場合がある。

##### 4.2 子音の有声化と入りわたり鼻音

楳法華方言では母音間の[t]と[k]が有声化することが多い。

- (13) a. 「ハタ」→ 「ハダ」 「旗」  
b. 「コト」→ 「コド」 「(～した) こと」  
c. 「ムカシ」→ 「ムガシ」 「昔」  
d. 「タケ」→ 「タゲ」 「竹」

矢印の左側の単語は矢印の右側のように発音される。このような有声化が起こった場合、本来の有声音[d]と[g]を持つ単語との区別が付かなくなる可能性がある。例えば、「的」と「窓」がその一例である。しかしこの二つは楳法華方言ではきちんと区別されている。なぜなら入りわたり鼻音が存在するからである。「的」の方は有声化が適応されるため「マド」と発音される。一方「窓」の方は「マンド」に近く発音される。後者の「マ」と「ド」の間にある「ン」は調音時間が通常の「ン」よりも短く、「ド」に添えるように発音されるものである。

この音は「入りわたり鼻音」と呼ばれ、ちょうど共通語の[d] [b] [g]に対応する音の前に現れる。共通語では本来濁音である[d] [b] [g]と連濁によって有声化した[d] [b] [g]の区別ができないが、楳法華方言では前者は入りわたり鼻音付きの<sup>m</sup>[d] <sup>m</sup>[b] [g]として、また後者は入りわたり鼻音なしの[d] [b] [g]として区別されるのである。

## 5. 榎法華方言の語彙の特徴

榎法華方言の語彙の特徴として以下の3点がある。

(14) 津軽、南部方言および北海道内の方言との共通性

(15) 古語の残存

(16) その他の方言との共通語彙

(14)の例としては「ナ」(おまえ、あなた)「ワ」(おれ、わたし)「チョス」(いじる)「アズマシイ」(心地よい)「ワラス」(子供)等が挙げられる。

(15)の例としては「ウダデ」(非常に。古語「ウタテ」より)、「アグド」(踵。古語「アギト」(顎)より)、「ネマル」(座る。古語「ネマル」より)等がある。

(16)の例として「ワヤ」(めちゃくちゃ)がある。この言葉は元々西日本で広く使われているもので、現在は北海道全域で使用されている。(15)の例の「ネマル」も北陸地方や東北地方で使用されている。榎法華村の場合は、入植した人たちの中に福井県出身者が多かったことが関係しているかもしれない。

## 6. まとめ

本発表では榎法華における風習と言語について紹介をした。冒頭でも述べたように榎法華村は2004年12月に函館市と合併する。さらに行政上の地名としての「榎法華」という言葉は使用されなくなってしまう。このことによって若い世代が榎法華の風習と方言に対してこれまでとは異なる意識を持つことが予想される。今回の調査で得られた風習を知る話者はすでに高齢化している。本方言の調査と保存の緊急性は増すばかりである。

## 付録

以下に本発表で取り上げたデータの音声表記を挙げる。簡易表記を中心にして子音の有声化、母音の無声化、母音の中舌化を補助記号で表した。

(1) uimisa hairuutokidaŋe sonoto:rijo ne itsinisan demot<sup>ʔ</sup>te no u:mi<sup>h</sup>no kamisama  
tat<sup>ʔ</sup>tekeret<sup>ʔ</sup>te no

(2) soŋite hore oŋik<sup>ʔ</sup>ko suiru<sup>h</sup>noni uimisa muikauanede okasa muikat<sup>ʔ</sup>te ɕo<sup>m</sup>ben  
sɕitamo<sup>n</sup>da

(3) tat<sup>ʔ</sup>tekere te uimisa hait<sup>ʔ</sup>tetemo uareuare ɕo<sup>m</sup>bensu<sup>h</sup>rukara oŋik<sup>ʔ</sup>ko su<sup>h</sup>rukara  
ne ma uareuareno koɕobade ju<sup>h</sup>eba ma ju<sup>h</sup>ru<sup>h</sup>sɕitekeret<sup>ʔ</sup>te ju<sup>h</sup>:imi nandabesi no

- (4) ma: sos̺ite naḡeba joḡuine̺ ano naḡeba jamakara moḡko ku̺irudoṭˊte moḡko ku̺irudoṭˊte joḡu iuḡareṭa
- (5) obaḡeno moḡkodamonojara oreda ka̺iseṭṣu̺is̺itabaˊini areno are nante ju̺itˊtetadaka mo:koga semeṭeḡiteno
- (6) moḡkoṭo mo:koo iḡˊḡon̺is̺iteiru̺i s̺iteiru̺imonojarane
- (7) mo: hoṭˊtondo mo: so:ju̺i: koṭobamo naḡu̺inatˊtasine
- (8) ga<sup>n</sup>dze toru̺uḡaḡedabesi: no so̺ide ko<sup>n</sup>do mazu̺i toṭˊte moṭˊte ku̺iru̺ideḡo hore maru̺isino oja<sup>n</sup>dziṭoḡa ḡoḡˊkoṭatsi ojoḡene:kara oḡamaḡaṛis̺iṭe ḡi:ta̺iṭe ta̺iṭe maṭˊteru̺ibesa
- (9) siṭe uḡaḡeru̺iṭoḡimo korede okˊki:ho:kara oḡamaḡaṛimo ḡiṭoṭˊtsu̺i ojode ok̺isa iṭˊṭeḡiṭa siṭon̺imo siṭoṭˊtu̺i daḡara hoṭˊto:ni sono iṭimemo nekaṭˊtasino